

相馬高校理数科の思い出^(※1)高理第1回卒 熊川 宏美^(※2)

私たちは昭和 44 年に新しく開設された理数科の第一回生という栄誉を偶然ながら頂戴した。本当は理数科がどんな科なのか十分理解せず、ただ大学受験に有利かなといった単純な理由で受験したのである。入学後はいわゆる進学組といった目で周囲から見られたが自分たちにもそのような自負心が満ちあふれていたと思う。このような状況から校内体育大会では他のクラスとトラブルが起きたり、数学の寺島^(※3)先生から“おまえら大した気してんじゃない”などと気合いを入れられたりしたこともあった。

しかし、理数科の3年間はクラス替えもなく担任の交代もなく、また幸か不幸か女生徒が一人もいなかったのが男ばかりの気楽な高校生活が楽しめた。今になっても男子校でよかったと思っている。もっとも、理数科には教室の窓から3年間登下校の女子高生をじっくり眺めることができたというおまけがあった。

我々の高校生活で一番印象深いのは学級担任であった田辺博^(※4)先生との出会いである。自分で考え自分で決めるという基本を初めて教わった先生である。田辺先生とは現在もクラス会などを通じて親交がある。飄々とした雰囲気の中で決して生徒に自分の価値観の押し売りなどしない教師の登場は、相馬高校自体が持っていた自由闊達な雰囲気とも相まって一種のカルチャーショックであった。管理的色彩の濃かったそれまでの中学生活に比べ何と開放的かと思ったものである。それに我がクラスには伊藤修^(※5)君という大変ユニークな存在もあり、彼の提案で決めた席順なし早い者勝ちという着席方法によって毎日代わる席で食べる早弁の味はなかなかのものであった。

授業を受けた先生方にも思い出深い先生方がたくさんおられる。詳細は紙面の都合で省かせていただくが、先に挙げた寺島先生にはよく授業中に自分たちの高慢さについてしかられたことを思い出す。オートバイで通勤されていた若き日の先生は単刀直入に我々をしかってくれたと思う。生徒会か何かの関係で帰りが遅れたとき、たまたま当直室でごちそうになった先生の夕食用の弁当の味は忘れられない。今思えば食べ損なった先生の空腹感を思うと申し訳ないことをしたものと思う。3年生の時難解な数学の問題があったが、授業後の廊下で簡単に解ける別の方法を示したところ先生がびっくりされ、このときの爽快感も忘れることができない思い出である。

私は相馬高校卒業後 14 年ばかり相馬を離れていたがいつも春になれば馬陵公園の桜並木と校門の枝垂れ桜が頭をよぎり郷愁をおぼえたものである。列車通学で重たい鞆を持って毎日の往復約 2 時間はまことにもったいなく生徒会活動おいても苦勞したが、相馬高校の3年間は何事にも全力で取り組み立ち向かえた純粋で爽やかな時代であったと思う。

(※1) 「相中相高百年史」1998(平成10)年7月6日発行、「思い出の記」より。

(※2) 昭和47(1972)年卒、日立木出身。

(※3) 寺島琢彦。高普第14回、昭和37(1962)年卒、駒ヶ嶺出身。

相高教諭(数学): 昭和43~54年。昭和58~平成6年。

(※4) 相高教諭(生物): 昭和32~48年。

(※5) 高理第1回、昭和47(1972)年卒、新地出身。